

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2022 Vol. 10

キャリア、出会い、
結婚、子育て……
一人ひとりの志と
幸せを叶えた
輝く女性医師たちの
離島物語。

沖縄の離島で輝く女性医師たち





Muru Uchina

ムルウチナー

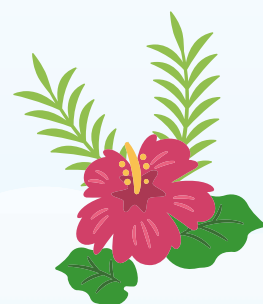
オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン「ムルウチナー」。

『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

今号は、キャリア・出会い・結婚・子育てなど
一人ひとりの志と幸せを叶え、輝く女性医師たちの
離島での物語を特集します。





2022. Spring vol. 10

INDEX

沖縄の離島で輝く女性医師たち



P.02

Top Session

離島を守る島医者の“働きやすさ”の進化へ

沖縄県病院事業局 医療企画監
小児科専門医・指導医
中矢代 真美 先生



P.06

Sunset of the Island

沖縄ドクターズ物語



P.10

OKINAWA DOCTORS SCENE

～ 離島で働く女性医師の話 ～

#1

沖縄県立中部病院
安座間 由美子 先生

#2

伊平屋診療所
真栄田 この実 先生

#3

久高診療所
有路 春香 先生

#4

北大東診療所
下里 美由希 先生





Interviewee

中矢代 真美 先生

Mami Nakayashiro

Title

沖縄県病院事業局 医療企画監
小児科専門医・指導医

Profile

大阪府出身。1993年3月、岡山大学医学部卒業。沖縄県立中部病院にて研修。沖縄県立宮古病院、沖縄県立中部病院の小児科を経て、米デンバー小児病院へ留学。帰国後、沖縄県立中部病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにて小児循環器医療の第一線で活躍。2018年4月、同センターの小児科部長。2021年5月、沖縄県病院事業局 医療企画監に就任。



離島を守る島医者の “働きやすさ”の進化へ

沖縄の小児循環器医療の第一線で活躍し、

指導医として“島で1人でもやれる小児科医”を数多く育ててきた

沖縄県病院事業局医療企画監の中矢代真美先生が語る、沖縄の離島医療に携わる魅力と
“島医者”になる意義とは――。



「島医者たちのQOLを上げ、安心して離島医療に従事できるシステムをつくっていきたい」
そう力強く語る中矢代真美先生は、沖縄の小児循環器医療の発展と優れた小児科医の育成に尽力してきた経歴を持つ。
大学在学中に結婚、出産を経験し、卒業後は子育てをしながら沖縄県立中部病院で研修を行い、小児科の道に進んだ。米デンバー小児病院への留学も経験し、帰国後は沖縄の小児循環器医療の発展に貢献してきた。さらに中矢代先生は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの小児科部長として、島で1人でもやれる小児科医を多く育ててきた。ここを巣立った医師たちは沖縄や他県の救急・集中治療・血液腫瘍・感染症・精神・放射線

立中部病院で研修を行い、小児科の道に進んだ。米デンバー小児病院への留学も経験し、帰国後は沖縄の小児循環器医療の発展に貢献してきた。さらに中矢代先生は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの小児科部長として、島で1人でもやれる小児科医を多く育ててきた。ここを巣立った医師たちは沖縄や他県の救急・集中治療・血液腫瘍・感染症・精神・放射線

沖縄の島医者たちの QOL向上を目指して

島嶼県である沖縄県の医療における重要課題の一つが、離島における医師の持続的な人材確保だ。沖縄県病院事業局では、年に1回、16の県立離島診療所に勤務する島医者たちと、それぞれ

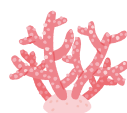
確保、臨床研修や県立病院の運営に係る企画調整の責任者として指揮を執っている。

など全国の小児医療分野、さらに離島医療、海外の大学、発展途上国の医療現場などで活躍している。
小児科医としてはもちろん、指導医として医師教育や人材育成にも実績のある中矢代先生は、
2021年5月、沖縄県病院事業局の医療企画監に就任し、
沖縄県の医師の人材

“働きやすさ”に向けた、迅速な 課題解決とシステムづくりへ

「スピード感をもってタイムリーに課題解決していく」ということで、2021年より新たに2か月に一回、島医者のみなさんと一緒に課題や問題点を協議する意見交換会を実施するなど、迅速な課題解決を目指しています。前回は電子カルテについてや、島で一人医師であることなどの大きな課題である

れの離島診療所を管轄する県立病院の院長、そして局長らが参加し、離島医療の課題解決に向けた会議が行われている。島医者たちから出された課題や要請など現場の声に応えながら、沖縄県の離島医療の働きやすさは着実に前進してきたが、中矢代先生は「もっとスピード感をもって対応していきたい」と語る。





休暇について協議しました」

医者は診療所勤務としては土日休みだが、一人医師であるため休日であっても、常にオンコール携帯を手放すことができない。島医者が島を出るためには、島が医師不在とならないように県から配置されているドクタープール医師による代診のほか、管轄の県立病院から代診の医師が派遣されるが、それでも年間に島を出ることができない回数に限られている。オンコール携帯から開放されて休日を通ぐることがなかなか厳しい状況だ。

「2024年4月からは『医師の働き方改革』も施行されます。沖縄でこれまで前例としてなかったのですが、離島に赴任した女性の先生が島で結婚・妊娠されました。女性の先生が安心して育児休暇を取っていたら、今年度よりはじめて県外からの医師確保に

動きました。今後はその

ときそのときで対応するのではなく、システムとしてあらゆるケースを想定した万全のサポートができる体制づくりを推し進めています」

沖縄県では、島で一人医師であっても診療に不安を感じさせない体制がとられていて、沖縄県には16か所の県立離島診療所があり、それぞれの診療所を南部・中部・北部にある各県立病院が島医者の診療を24時間体制でフォローしており、沖縄県全体でもバックアップしている。

「沖縄県の離島医療では、日々の診療でわからないことや、緊急時の対応、さらに自身の体調が優れないときの代診など、電話での相談や遠隔診療支援を24時間365

一人医師でも安心・安全な充実したバックアップ体制

日体制で対応できるシステムが構築されており、安心して診療にあたることがができます」

さらに、Web会議ツールを利用して島医者同士や指導医との情報交換、振り返り、さらに勉強会や臨床研究など、教育面のサポート体制も充実している。

そして離島での一人医師体制においては、防犯など島医者の安全を守ることも重要だ。特に女性医師にとっては安全確保や防

犯対策は気になるところだろう。

「官舎に防犯設備や診療所に緊急ボタンを設置したり、時間外診療の際には島の消防団に立ち会ってもらったりなど、一人医師という状況であっても安全がしっかりと確保できる体制も整えています」

日本は超高齢化社会に突入し、これからの医師は複数疾患を総合的に診ることができるようになる。診療力と、患者の生活を支える介護・福祉リハビリテーションなど、地域他職種との連携やマネジメントができるスキ

ルが求められている。

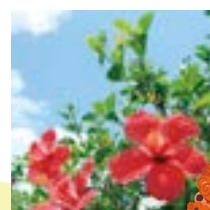
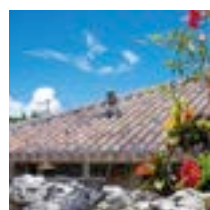
沖縄の離島には日本社会の縮図があり、「離島医療の経験は、日本のどこでも通用する実力となり、医師としての大きな自信にもなるはずだ」と、中矢代先生は力強く語る。

「さらに、臨床だけではなく、いかに医療の安全性を高められるか、いかに地域の健康増進につながるかなど臨床研究にも参画することで、離島という小さな場所が、日本全国、さらに国際的な医療政策に影響を与えるような、大きな広がりをもった視点を持ち続けられる場所となり、一人医師であることの孤独感もなくなるでしょう。

島医者は島民の命を守るだけでも十分に意義のあることですが、臨床研究を通して島医者であることの意義は大きく広がり、深まっていくはずだ」

沖縄の離島医療を経験することは自分の可能性を大きく広げることにもなる。たとえば数週間という短期間であっても、島医者の経験は今後の長い医師人生を支える医師として

小さな離島からでも国際的な広がりが生まれる



の大切な考え方や姿勢、価値観を植え付けてくれるはずだ。

島民にとって島医者は安心して暮らすために必要な、大切な存在だ。島医者と島民との距離はとても近く、コミュニケーションを深めながら病気だけではなく人を診る。島民から何でも相談され、頼りにされることは医師としての本望であり、どこよりも大きなやりがいを実感できるだろう。

そして沖縄の離島には美しい自然、過ごしやすい温暖な気候、穏やかな時間が流れている。都市部にはない贅沢な環境のなかで生活を愉しめることも沖縄の島医者になる大きな魅力だろう。

「第二の医師人生の場として離島医療を希望する先生も増えています。年齢や体力の衰えによって当直ができなくなった先生や以前のような手技ができなくなった外科医の先生。学生時代に本当は離島医療がしたかった先生、島の環境で子育てをしながら地域医療を経験したい先生。どんなバックグラウンドを持つ先生であっ

島医者たちの幸せのために 沖縄の離島医療は進化する

でも、安心して柔軟に島医者として働くことができる環境をつくっていききたいですね」

沖縄の離島医療は、日本全国の地域医療、へき地医療のモデルとして注目を集めてきた。全国の離島医療のなかで、沖縄県の島医者の働きやすさは最先端にあるといっている。沖縄県では、安心して離島医療に従事できるよう、島医者の安全を守り、日々の診療を全力でバックアップする体制が整っており、さらなる働きやすさの進化に向けて動いている。

沖縄の島医者になることは長い医師人生のなかで非常に大きな意義のあることだ。沖縄には離島の数だけ、それぞれの島医者が輝く主人公となり、医師としての志と幸せを叶えた素敵な離島物語がある。

中矢代先生は声を大にしている。

「島医者のやりがいは大きく、一人ひとりの医師人生をとっても豊かなものにしてくれるはず。沖縄の離島医療をぜひ経験してほしいですね」

Q. 先生にとって沖縄の離島医療とは

A. どこでも通用する実力を獲得でき、
医師人生を豊かにしてくれる場所

Sunset of the Island

沖縄ドクター物語

私の名前は石田はな。
東京育ち。
医者 of 少ない地域で役に
立ちたいという想いで医
学部卒業後、沖縄県立中
部病院の総合診療専門医
コースを初期研修の地に
選んだ。
2年目の現在、瑠璃先生が
赴任する小浜診療所で離
島研修中。

初期研修2年目
石田 はな

小浜診療所 島袋 瑠璃

琉球大学医学部を卒業後、沖縄県立中部病院の総合診療専門医コースにて初期研修。その後、同病院の総合診療科専門研修プログラムに参加。専門研修3年目の2020年4月より沖縄県立八重山病院附属小浜診療所に赴任。島民や島に訪れる観光客の健康を支えている。

海沿いの
喫茶店の
奥さんだ！

次は主人が釣っ
てきた魚で海鮮
のカルパッチョ
を作ってくるね！
また試食して！

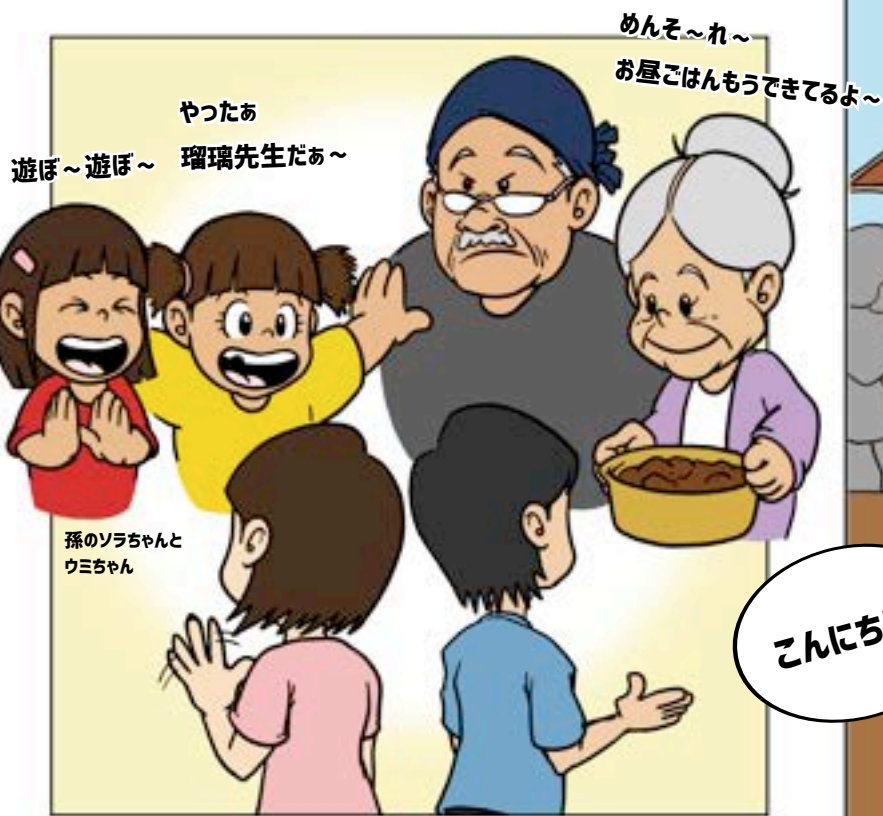
この前いただ
いたもずくの
佃煮とてもおい
しかったです！

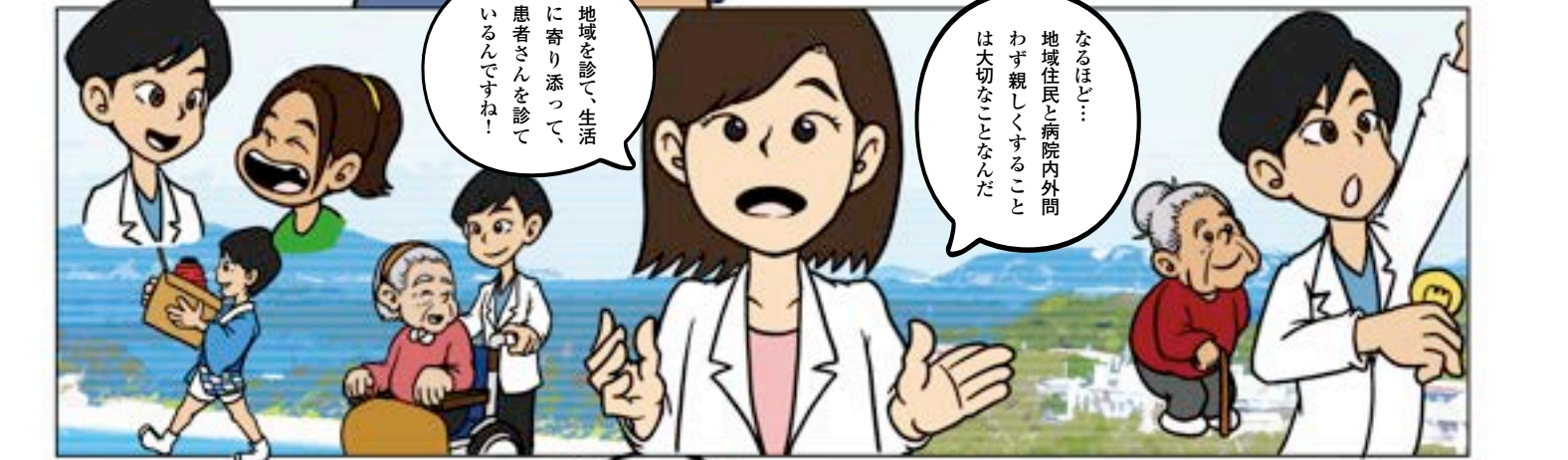
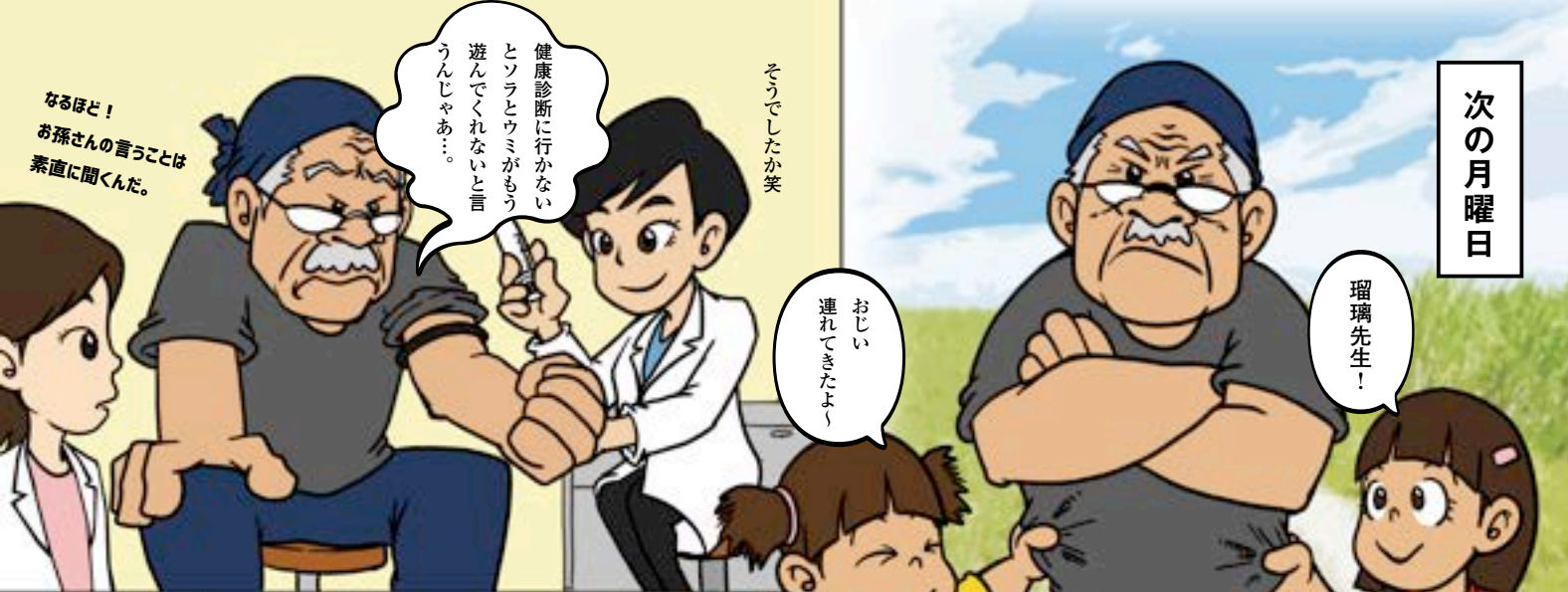
はな先生カップ
麺ばかり食う
てるやろ、明日の
お昼ごはん用意
してあげるから
うちに来なさい！

そっか！そした
ら一緒に行こう！
ちょうど高城のお
じい様子を見て
行こうと思ってい
たから。

午前中、診察に来た
高城のおばあちゃんが
明日瑠璃先生と2人
でお昼ご飯食べに
おいでって、誘って
くれました。

今週もお疲れ様！
休日はゆっくり小浜島
を楽しんでね！







瑠璃先生！
今日の英語教室
よろしくお願いします！

この島に赴任当初…
沖縄出身にも関わらず、おじいおばあの話す島の方
言が分からずに、看護師さんに通訳をしてもらって
いたことがあって……

英語教室？
英語も教えているの？

これには
訳があつて……



この島に英語
塾や英会話教
室がないと聞
いて

お礼も兼ねて
自主的な活動
もしているん
だ！



あっ、これは研修医時
代にメモしたノート。
今でも役に立っている
んだ！



医療資源の限られたこの島で、
子どもから老人まで、みんなの
生活に寄り添い、また、一緒に
生活しながら島をまるごと診て
いる瑠璃先生の姿をみて、私も
瑠璃先生のような医師人生を送
りたいと思いました。

DOCTORS
SCENE #1

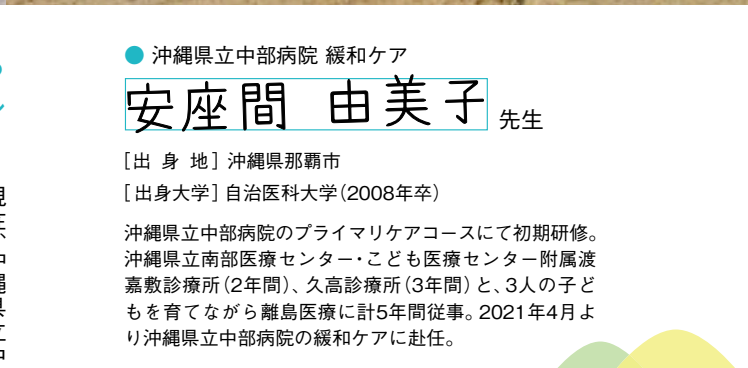
～ 離島で働く女性医師の話 ～

沖縄県立中部病院

Yumiko Azama

島医者とは

“人育て、母育て、子育て”

Uruma
うるま市離島だからこそ獲得できる
医師としての大切なスキル

現在、沖縄県立中部病院の緩和ケアで活躍する安座間由美子先生は、島医者として渡嘉敷診療所に2年間、久高診療所に3年間、従事してきた。

最初の離島勤務である渡嘉敷診療所へは卒後5年目に赴任。渡嘉敷島は那覇からフェリーで約40分の距離にある人口約700人の島だ。そのとき安座間先生には生後7か月の子どもがいたため実母も一緒に島に移住した。

「夫は教員免許をもっていたので島の小学校の教員として働き、昼間の子どもの面倒は母にみて

● 沖縄県立中部病院 緩和ケア

安座間 由美子 先生

[出身地] 沖縄県那覇市

[出身大学] 自治医科大学(2008年卒)

沖縄県立中部病院のプライマリケアコースにて初期研修。沖縄県立南部医療センター・こども医療センター附属渡嘉敷診療所(2年間)、久高診療所(3年間)と、3人の子どもを育てながら離島医療に計5年間従事。2021年4月より沖縄県立中部病院の緩和ケアに赴任。



波嘉敷村にて。阿波連集落内を子どもと散歩

久高島を離れるとき。
お見送りをする島民と安座間先生

もらいました。島では子どもが外
でよちよち歩きをしても安全な
環境でしたし、海も近く、自然と
触れ合いながら子育てができた
ことは本当に良かったですね」

医師としては、離島医療を経験
したことで自信を手に入れたと
いう。病院勤務では何かあれば、
直ぐに専門科の医師に頼れるが、
島で一人医師という環境ではそ
うはいかない。

「電話などで相談はできても、処
置などは全て自分で行わなければ
いけません。医師としての自信と
度胸が自然と身につきましたね」

さらに離島医療は患者との距
離が近いことが特徴であり、離島
という環境だったからこそ医師
として大切なスキルを得られた
と安座間先生は語る。

「離島では患者さんの家に行く
こともあり、生活背景も把握しや
すく多角的に診る視点を自然と
養うことができます。たとえば、
がん治療を専門とする先生は治
療だけではなく、末期の方には家
に帰った後の生活など介護や福
祉の視点も必要です。こうした多
角的な視点は離島のような小さ
なコミュニティのなかでこそ培
われるものだと感じています」

島医者は医師のキャリアとし
ても総合診療や家庭医療の専門

医につながることはもちろん、臓
器別専門医を目指す医師にとつ
ても大きな土台となるはずだ。
「そして島医者になることで、何
でも相談される、頼れる医師へと
成長できます。これも医師として
大切なスキルであり、大きなやり
がいへとつながるものです」

島医者と子育ての両立が 医師人生を豊かにしてくれた

安座間先生が2度
目の島医者となった
久高島は、沖縄本島
南部から高速フェ
リーでわずか15分
に位置する人口約
200人の小さな島
だ。このとき、安座
間先生には3人の子
どもがいた。沖縄本
島の保育園に子ども

を通わせていたこともあり、本島
からのアクセスが便利な久高島
を希望して赴任した。

「3人の子育てをしながらの島
医者は大変だったのでは」と聞く
と、安座間先生は満面の笑みでこ
う答えた。

「島医者という仕事は、人育て、母
育て、子育てをしてくれるんです」
そしてこんなエピソードを話
してくれた。

「子どもが学校帰りに診療所に
カバンを置いてよく遊びに出か

けていたのですが、島だと学年に
関係なく、みんなで遊んだり、勉
強したり、人間関係を築くための
素晴らしい環境があるんです。あ
る日、時間外診療で呼ばれたとき、
いつもなら泣いて私を引き止め
る子どもが、『早く行って治療し
てあげてよ』というんです。島の
環境が、いつの間にか人を思いや
る心も育ててくれたんです」

また、安座間先生は仕事と子育
てを両立したことで、子どもに上
手く向き合うことができたと言
う。『子育てだけだと自分と子ども
だけの世界になり、子どもの些細
なことが気になってしまう。仕事
と両立した方が子どもにも上手く
向き合えますし、育児は小児や親
御さんへの対応など診療にも活
かされます』

島医者の5年間は、安座間先生
を医師として、母として、そして
子どもも大きく育てた。安座間先
生は喜びと幸せを噛みしめるよ
うにいう。

「子どもたちが、『お母さん、頑
張ってるね』『お母さんみたいな
病院の先生になる』っていつてく
れるんです。本当に嬉しいです
よね」

誰よりも、子どもたちのその言
葉が安座間先生の大きな活力と
なっている。



Hospital Data

沖縄県立中部病院

〒904-2293 沖縄県うるま市宇宮里281

TEL:098-973-4111

<https://chubuweb.hosp.pref.okinawa.jp/>



展望台から港を望む



波嘉敷診療所時代

Iheya
伊平屋

Nago
名護

DOCTORS SCENE #2

～ 離島で働く女性医師の話 ～

伊平屋診療所

Konomi Maeda

島医者になって実感する、
「なんて私は幸せなんだろう」



初期研修は総合力を習得するために沖縄県立中部病院のプライマリケアコースに進んだ。そして初期研修2年目の離島研修で伊平屋島を訪れた際、島医者となり再び伊平屋島に戻ってやることを決意したという。

「売店でカップラーメンを買ったら、『ちゃんと食べてるの?』と

責任を一手に引き受ける 医師としての自覚

沖縄の離島で運命が待っていた。

「子どもからお年寄りまで、幅広い人に役立つ仕事がない」と思い、医師を目指した真栄田この実先生。育ってきた横浜、大学のあった東京を離れ、

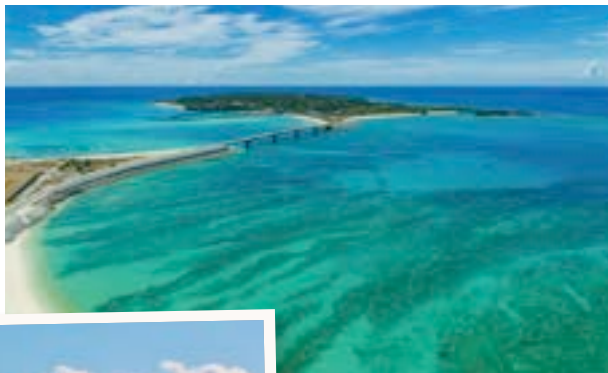
● 伊平屋診療所

真栄田 この実 先生

[出身地] 神奈川県横浜市

[出身大学] 日本大学医学部(2016年卒)

沖縄県立中部病院のプライマリケアコースにて初期研修。その後、沖縄県立中部病院の総合診療専門医研修プログラムの専攻医。2020年4月より、沖縄県立北部病院附属伊平屋診療所に赴任。伊平屋島で夫と出会い2020年11月に結婚。



沖縄本島から北に約41kmほど離れた
自然豊かな伊平屋村。
今帰仁運天港からフェリーで約80分



心配してくれたり、たくさん声をかけてくれるなど、伊平屋島のみなさんがとても優しく感動しました。この島に絶対に戻ってこようと思いましたね」

伊平屋島は沖縄最北端にあり、沖縄北部からフェリーで約1時間20分に位置する人口約1200人の島である。真栄田先生は2020年4月に念願の島医者となり伊平屋島に戻ってきた。

午前中は外来で20人ほどの患者を診て、午後は予防接種や訪問診療にも出かける。

「島には一人暮らしの高齢者も多いので、お昼に様子見がてら家に行って一緒にご飯を食べたりも



しています」と、真栄田先生は微笑む。

真栄田先生は総合診療医として、ときに小児の診療や骨折の患者の処置など、幅広い診療科の役割を担っている。急患発生時はドクターヘリなどによる専門病院への搬送も重要な仕事だ。

「島で唯一の医師として自分のできる限界を知ることができたし、搬送先の病院になんといわれようが患者さんのためにこの判断したんだという、責任を一手に引き受ける医師としての自覚や覚悟が生まれました。医師として強くなりましたね」

島医者となつて 人生の幸せも叶える

島医者は公衆衛生も担う。2020年12月には島外から来た新型コロナウイルスの感染者により30人に及ぶクラスターが発生し、真栄田先生も対応に尽力した。

「大変でしたが、管轄病院である県立北部病院や、保健所、役場などと密にやり取りしながら、みんなに助けてもらい、なんとか乗り切ることができました」

「初期研修で伊平屋島に初めて来たときから、自分に合っているなと感じたんです。この島の人と結婚するということは、この島に居続けることなので、島の患者さんを10年診てもいい、島に10年住んでもいいと思ったからこそ結婚したんです」

真栄田先生は伊平屋島に赴任したことで人生の伴侶と出会った。役場に勤める夫は、仕事の傍ら沖縄県立芸術大学で琉球古典音楽を学び、伝統継承のために島で三線教室を開いており、真栄田先生も教室に参加して三線を習っているそう。2022年5月には子どもが生まれる予定であり、産休・育休の間は代診医師が診療所を守り、一年間の育休後、再び

島医者として伊平屋島を支える。コロナ禍によって結婚式はまだ挙げていないが、島の美しい景色のなかでウエディング写真をたくさん撮ったという。

「島民の方、患者さん、みんな結婚を喜んでくれました。三線教室ではサプライズでケーキをもらったり。なんて私は幸せなんだろうって、何度も思いましたね」

伊平屋島ではイベントが多く、10月開催のマラソン大会には全国から毎年1000人もの人々が参加する。しかし、真栄田先生が赴任してからはコロナ禍により行事は軒並み中止となった。コロナ禍が落ち着いた2021年11月、97歳の長寿を祝う島の行事「カジマヤー祝」が行われた。真栄田先生は、そのときみた97歳のおじいさんの笑顔に、「みんながこんな素敵な笑顔で年齢を重ねていくよう、全力で島民の健康を守っていきたい」と決意を新たにしている。

診察室の壁には、島のおじいやおばあの写真がたくさん貼られている。畑に遊びに行ったときの写真。研修医との写真。島の運動会の写真……。どの写真にもおじい、おばあさんの明るい笑顔があふれている。それを見つめる真栄田先生にも、南国のひまわりのように幸せな笑顔の花が咲いていた。

Hospital Data

沖縄県立北部病院附属 伊平屋診療所

〒905-0703 沖縄県島尻郡伊平屋村我喜屋217-3

TEL:0980-46-2116

<http://www.hosp.pref.okinawa.jp/sinryo/iheya/iheya.html>



三線教室の皆さんと



DOCTORS
SCENE #3

～ 離島で働く女性医師の話 ～

久高診療所

Haruka Ariji

Kudaka
久高

家族も幸せになる、
離島医療の新しい働き方



安心でメリットも大きい
離島医療を夫婦で担うこと

久高島は沖縄本島南部から高速船で約15分に位置する人口約200人の島であり、琉球誕生の祖である女神アマミキヨが天から舞い降りた、神の島とも呼ばれている。

久高島の医療を支えるのは有路春香・登志紀先生夫妻だ。島に赴任した理由を聞くと、夫である登志紀先生は「妻の離島医療への情熱に巻き込まれた感じなんです」と大きく笑った。

小学生時代に旅行で訪れた阿嘉島をきっかけに、島医者に強い興味を抱き続けてきた春香先生は、初期研修を沖縄県立中部病

● 久高診療所

有路 春香 先生

[出身地] 東京都

[出身大学] 順天堂大学医学部(2016年卒)

沖縄県立中部病院のプライマリケアコースにて初期研修。1年間休職した後、海外ボランティア活動、ハワイ大学への留学などを経て、東京都内のクリニックに勤務。2021年4月より沖縄県立南部医療センター・こども医療センター附属久高診療所に赴任。



島内放送で予防接種に関する呼びかけをする登志紀先生



島へのアクセスはフェリーで約25分(高速船で15分)。
本島(安座真港)↔久高島。1日6往復便毎日運航！



院のプライマリケアコースで行った。初期研修修了後一年間休職し、昔から興味のあった海外でボランティア活動などの経験を経て帰国。その後、沖縄を離れて東京の病院に勤務し、登志紀先生と結婚。子どもができたことで島医者への思いが再燃した。

「子育てをしながらの離島生活もいいと思ったんです。中部病院時代の上司に相談をして、私の強い希望で夫も一緒に来ることになりました」

登志紀先生の専門は消化器外科だが、島医者になることに不安はなかったのだろうか。

「県立病院が島医者を日常的にサポートしていますし、何より妻が一緒なので安心でしたね」

診療所では春香先生が月・火・木を、登志紀先生が水・金の診療を担当する。離島医療を夫婦で担うメリットは大きいと有路先生夫妻はいう。

「体調を崩したとき、急遽夫に診療を代わってもらったことがあります。夫婦だと交代で家事や買い物、子どもの世話もできますからね」と春香先生。登志紀先生も、「情報を共有したり、相談できる相手が身近にいただけで安心感が100倍くらい違う。それに診療所と家が近いので昼

ご飯と一緒に食べたり、家族と過ごせる時間が長いことも魅力です」と語る。

離島医療では外来、緊急対応、予防接種、公衆衛生と幅広い役割を担う。さらに春香先生は公開講座を開いたり、診療所便りを作って島民に配布するなど自主的な活動もしている。

「幅広い役割と責任を担うことはむしろメリット。医師として大きく成長させてくれますし、やりがいも大きいんです」

登志紀先生も充実した笑顔でこう語る。「島では患者さんとの距離が近く、不安や悩みに向きあい解決していくという医療の大切な部分が詰まっています。全人的な総合診療、診療所管理、予防医療などたくさん学びました」

研修・教育目的だけではなく働き方の新たな選択肢として

有路先生夫妻は島民たちから大切にされている。診療所や宿舎には魚や野菜をもつて島民が訪れる。島の元気な子どもたちは、先生の小さな子どもを見守る友達だ。見かけると必ず声をかけてくれる。

「嬉しいことですよね。夏は海に子どもを連れていって島の子

たちと遊んだり、最近では島の中学生たちに英語を教えているんです」と、春香先生は満面の笑みで語る。

都市部で育ってきた有路先生夫妻にとって離島での医療や生活にギャップはなかったのだろうか。春香先生は、「どこに行っても地域医療なんです。その地域で求められる医療を提供することに変わりはありません。それに、[〃]何もない豊かさ[〃]を島に来てからすごく感じています」という。

夫婦で離島医療に従事する例はあまり聞かないが、登志紀先生はこうした働き方をみなに知ってほしいと語る。

「離島医療はどんな先生でも挑戦できます。子育て世代にこそおススメですね」

久高島は子育てや生活環境としても最高だ。最近、黒柴も飼いはじめたという有路先生夫妻。官舎の庭には心地よい波の音に包まれながら人懐っこい島の猫たちがくつろいでいる。時間も風の流れるも穏やかで優しい。春香先生は島生活を振り返りながら、「本当に幸せですね」とつぶやいた。

診療所から直ぐの公園。海の煌めきを背景に立つ有路先生たち家族の姿は、絵に描いたような幸せな景色そのものだった。



Hospital Data

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター附属

久高診療所

〒901-1501 沖縄県南城市知念字久高231-2

TEL:098-948-1319

<https://nanbuweb.hosp.pref.okinawa.jp/about/shinryou/kudaka/>



DOCTORS SCENE #4

～ 離島で働く女性医師の話 ～

北大東診療所

Miyuki Shimosato

一人医師でも安心・安全。
そして何より島医者は楽しい

Naha
那覇

北大東島

Daito

南大東島



いつでも直ぐに相談できる 診療サポート体制が充実

研修を行うなど島で一人医師でも対応できる総合力を研鑽してきたのは卒後5年目。一人医師でも対応できる総合力を研鑽してきたとはいえ、赴任当初は不安だったと語る。

「どんな症例でも、全て自分の責任で対応しなければなりません。最初は不安でしたが今のところ

北大東島は那覇から飛行機で約1時間、沖縄最東端に位置する人口約600人の島だ。北大東診療所に勤務する下里美由希先生は、沖縄県立中部病院のプライマリケアコースで初期

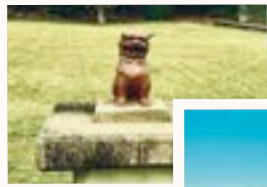
● 北大東診療所

下里 美由希 先生

【出身地】沖縄県宮古島市

【出身大学】自治医科大学(2016年卒)

沖縄県立中部病院のプライマリケアコースにて初期研修。その後、沖縄県立中部病院の総合診療専門医研修プログラムの専攻医。2020年4月より、沖縄県立南部医療センター・こども医療センター附属北大東診療所に赴任。



那覇から飛行機で約1時間、沖縄最東端に位置する北大東島



診察風景

問題なく対処できています。島医者になるために学んできたことが活かされているなど感じていますね」

島医者となって2年。現在の下里先生には不安による緊張感はない。その表情は朗らかで、瞳には医師としての自信も垣間見える。

「何かあれば、管轄の南部医療センター（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター）の先生や救急室に直接電話できるなどサポート体制は万全です。それと私になるべく負担をけないよう時間外に来る患者さんも少なく、島民の方々に大切にされているんだと感じています」

外来では日々、老若男女、多彩な症例を診る。粉瘤手術など外科的処置も多く、生活習慣病の管理など疾病対策も大切な仕事となる。

「血圧が高くても治療に來ない方がいて、急患で運ばれてくることもあります。早期発見や疾病予防のために受診を促したり、患者さんの服装から生活背景を読んだり、付き添いの人に情報を聞きながら診療に努めています。気軽に何でも相談、頼りにされる医師になりたいですね」

安全対策も万全。気軽に離島医療に飛び込んでほしい

ている。

島で一人医師という環境では防犯などの安全対策も重要だ。北大東島の官舎には防犯設備が整っており、診察室の机の下には緊急ボタンが設置され、ボタンを押せば診療所前の赤ランプが点灯し警報が鳴るようになった。

「時間外で救急コールがあった場合、医師と患者さんだけの状況はトラブルが発生する可能性があるため、軽症であっても必ず看護師さんにも来てもらいますし、要請すれば24時間対応している消防団の方が来て待機してくださいます。沖縄の離島医療は女性医師でも気軽に飛び込める安全な環境なんです」

北大東島ではスポーツが盛んで、祭事も多い。下里先生はイベントを通して島民との交流を楽しみにしていたが、残念ながらコロナ禍によって中止となってしまった。しかし、下里先生には診療所という交流の場があった。

夕方になると診療所前の公園に子どもたちが集まり歓声が響き渡る。診療所の待合室の壁に飾られた島民手作りのパッチワーク

クや折り紙、健康増進の啓もうとして貼られた「塩分チェック」「あなたの食事、何カロリー」といった手作りPOP、さらにクリスマス在天井飾りなど季節ごとに彩られる診療所の待合室は、島民が家のようにくつろげる交流の場にもなっている。

「島民の方はみな優しく、会えば声をかけてくれますし、診療所に果物や魚の差し入れもしてくれるなど、自然と交流が生まれ直ぐに打ち解けられる環境があります。人見知りの先生でも大丈夫ですよ」と、下里先生は微笑む。

日本は高齢化が進み、沖縄は出生率が高い。島医者のように子どもから高齢者まで幅広く診る医師は、日本全国のどこでも必要とされ、多くの医師が経験すべき分野だといえる。

「そして何より、島医者は本当に楽しいんですよ」と、下里先生の言葉が大きく弾む。

自然豊かな美しい島での生活。島民との心温まる交流。そして一人医師という環境で培われる総合力と医師としての自信。下里先生は目を輝かせている。

「沖縄にはたくさん離島があります。違う離島医療も経験し、島ごとに違う生活や文化、医療を楽しみたいですね」

Hospital Data

沖縄県立南部医療センター・
こども医療センター附属
北大東診療所

〒901-3902 沖縄県島尻郡北大東村字中野209-10
TEL:09802-3-4005
<https://nanbuweb.hosp.pref.okinawa.jp/about/shinryou/kitadaito/>



診療所スタッフと





Iheya 伊平屋
Izena 伊是名
Ie 伊江島
Naha 那覇
Kudaka 久高
Kerama 慶良間諸島
Kume 久米島

北大東島
Daito
南大東島

Yonaguni 与那国島
Ishigaki 石垣島
Iriomote 西表島
Hateruma 波照間島

Miyako 宮古島



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
琉球大学病院 おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101
TEL: 098-895-1225
E-Mail: chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>

